

中野重治詩集

筑摩書房

中野重治詩集

一九八〇年四月十五日 初版第一刷発行

著 者 中 野 重 治

発行者 布川角左衛門

発行所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二一八

〒一〇一・九一 振替 東京 六四二三

電 話 (〇三) 三九一・六五二 (営業)

(〇三) 三九一・六七二 (編集)

精興社 (印刷) 鈴木製本 (製本)

目次

大道の人びと

浦島太郎

しらなみ

爪はまだあるか

あかるい娘ら

眼のなかに

挿木をする

わかれ

たんぼの女

わたしは月をながめ

今日も

水辺を去る

夜が静かなので

ぼろきれ

三 八 九 二 三 四 五 六 八 三 三 五 六 二

はたきを贈る

噴水のように

蠅

垣根にそうて

最後の箱

夜の挨拶

女西洋人

浪

たばこ屋

北見の海岸

豪傑

夜明け前のさよなら

東京帝国大学生

思える

真夜中の蟬

新任大使着京の図

日々

歌

機関車

掃除

県知事

無政府主義者

帝国ホテル 一

帝国ホテル 二

新聞記者

「万年大学生」の作者に

ポール・クロードル

道路を築く

汽車 一	八
汽車 二	九
汽車 三	九
死んだ一人	九
彼が書き残した言葉	一〇
新聞にのつた写真	一〇
新聞をつくる人びとに	一〇
兵隊について	一〇
速く！ 速く！	一四
朝鮮の娘たち	二五
法律	二八
『無産者新聞』第百号	二九
やつらの一家眷族を掃きだしてしまえ	三四
壁新聞をつくるソ同盟の兄弟	三五

待つてろ極道地主めら	二七
夜刈りの思い出	二八
雨の降る品川駅	二三
いよいよ今日から	三六
今夜おれはおまえの寢息を聞いてやる	三九
画壇の英雄	四二
為替相場	四三
わたしは嘆かずにはいられない	四六
Impromptu I	四九
Impromptu II	五四
二月の雪	五六
十月	五九
古今的新古今的	六六
千早町三十番地	六二

そこに君は

君は歩いて行くらん

きくわん車

その人たち

取つて二十五へ

竜北中学校校歌

丸岡中学校の歌

一四

一六

一六

一七

一八

一九

二〇

中野重治詩集

大道の人びと

どこからともなく彼らはやつて来た

よわつた紋つきの男は高島易断の人相見をはじめた
紙をひろげて悪い人相を書いて人びとに示した

一つの横顔を上から下へ書いていつた

しかし眉や目や口などは

前から見たところを書いていつた

彼はうすつべらな書冊をひらひらさせた

そのなかに人の一生の運命が細大もらさず書いてあるといつた
それを読めば成功うたがないといつた

けれどもそれを売る彼はよわつた紋つきを着ていた

角帽に袴をつけた若い男は医業分業改正案を叫んでいた
彼は医者をつくる業がどんなものであるかを発^{あは}いてみせた
彼は一枚の紙を示してこれが処方箋だといった

彼をかこむ群衆のあいだから手が出てそれを買いとつた
並木の桜の下に毛布をしいた角刈の男は手品をはじめた

おしまいに彼は自分の鼻の孔へ釘をうちこみはじめた

長い光る五寸釘を鼻の孔に入れて下駄でかんかんたたいた
釘はすこしずつ中へはいつていった

うちこんでしまうと彼はふがふがといつてみせた

そういうあぶなつかしい藝がはじまるまで見物は立っていた
しかしそういう藝がすむと見物はそろそろ歩きだした

たいていは一銭の錢^{ぜに}もほうらずに黙つて歩きだした

四辻には猿ひきがいた

ちいさな太鼓をたたきながらときどき猿を手もとへひきよせた

見物のなげた芋の皮を猿はまたたきしながら器用にたべた

——今日はお彼岸ひがんの中日だ

たくさんおもらいしろ

猿ひきが猿の顔も見ないでどなつた

どこからともなく彼らはやつて来た

数知れずやつて来た

砥石

安全かみそり

キンの指輪

おつとせい 蘇鉄の実

夜は夜で朝鮮飴

それからくじびき

彼らは一様にくろい顔をしていた

キンの入れ歯をしていた

あるものは暑いさなかによごれた衾あわせを着ていた

あるものは木枯こがらしのなかに麻裏草履で立つていた

どこからともなく彼らはやつて来た

そしてどこかしらこつそりと帰つて行つた

昼となく夜となく彼らはやつて来た

そしてピストルを射うつたり大声に叫んだりして人を集めた

ここから内らへはいつてはいけないといつて杖で円をかい
たべらべらとしつきりなしにしゃべりつづけた

見物が笑つて見ていてくれるとき

自分がよどみなくしゃべりつづけられるとき

そのときが彼自身もつとも幸福であるかのように
見物が散つてしまつたり

見物の集まり具合が思わしくなかつたりすると

彼らはとなりのやはりそのような男に話しかけた

そのわずかな言葉は

通りすがりの人の耳にあわれにひびいた

寒い地方 暑い地方

諸国をまわつて来たそのわずかな言葉は

その季節季節の風のなかにあわれにしわがれて消えていつた